

會議記 要 (三)

日時 昭和十九年一月十三日午後一時半
場所 國家實力研究所會議室

記

今回は荒木 中川兩理事は未所せられたるも、直ちに日本銀行へ本研究
所業務報告等の為赴かれたるにより 白井参映 平井 渡辺兩屬託 石倉
河野 児山三研究員のみにて開議。後半より荒木理事のみ日本銀行より歸
未出席せらる。本會議に於ては前回に引続き、「資金計畧の意義とその重
要」に關し討議続行、略各自の意見一致したるとより、その範圍に於て當
研究所の立場を表明すべき一文を起草すべき旨 石倉 河野兩研究員に対
し荒木理事より命令あり。(右草案は翌十四日以降河野研究員病氣缺勤の
為 石倉起草 兩理事に送付す。)

次いで物価調査の審議に移り 荒木理事 石倉研究員より二三の質疑と

河野 児山研究員より答弁あり 次いで渡辺囑託より入手方法を記載すべ
き修正意見ありて可決 午後四時頃散会す。

會議記要 (三)

日時 昭和十九年一月十九日午後一時半
場所 國家實力研究所會議室

記

國家實力研究所研究局會議は荒木理事、中川理事、白井参典、平井福託、石倉、児山両研究員出席の計で開催。石倉研究員より一二事務上の報告ありたる後、「資金計画の意義とその重負」の石倉起草原案に対し両理事より一二の修正意見あり。就中國家實力と國家資金との區別に関する討議あり。兎に角一応右原案の終極案に付し次回會議に於て全研究員の討議に付すべきこと決せらる。(右原案は別添の如し)

次いで児山研究員より物価調査案の提出あり。先づ東京の調査に着手し、その反響如何により漸次地方に及ぶべき旨荒木理事より指示あり。更に本調査は防諜上極く軽き意味にて内々の小範圍の調査に止むべき旨、一同諒

解の上、調査案の配付を受け午後四時半散会す。

資金計画の意義とその重要（案）

国家資力研究所 石倉委員

膨大なる物資を必要とする今日の如き高度の戦争経済運営の爲には、物資の需要供給の適合は自由市場に於ける価格による調整作用に任すことを得ず、生産を意識的に戦争需要に適合させることが必要となり、かくて計画経済体制が採用される。

計画の第一段階は戦争の物的需要の測定であり、次いで需要充足の必要手段の測定が行はれる。後者は人口、原料、動力、工業施設、運輸施設等より成るか、之等を戦争需要に適合させる爲に物資及び労務の動員とその重要主義的な合理適正な配置とが国家により統一的に計画される。

併し今日の経済は尙資本主義機構下に在るか故に、物資及び労務は單に計画主体の意思のみによつて動員配置せられず、その計画実現の不可缺な手段、必然的存在る実践形式として貨幣が要求され、かくて物動計画、労務

八三

動員計画、生産力拡充計画等と相照応し、それらを補完し綜合するものとして茲に資金計画が要求される。

八四

且つ貨幣は今日に於ても單なる配給切符ではなく、夫自体価値の保持者として自律性を有し自由経済的性質を殘存せしめてあるが故に、この計画は物資、労務の動員計画より遙に複雑性を有する。然つてこの計画は例へば貨幣流通の現状、財産及び所得の金額と分布（その変動）等を考慮の上帝に貨幣と物資との均衡を確保し、かかる貨幣の自由交換的性質が、全計画経済の運営に障害乃至破壊を及ぼさざるのみならず、更にその運営を最も效果的能率的ならしめる様に精密に策定されねばならぬ。かくて「資金計画」は物資労務動員計画に一応從屬しながら、しかも後者の運行を規定するものとして極めて重要な役割を有するものとなる。

かく資金計画は労務及び物資の重点的能率的配分をスムーズに進行せしめることを使命とするが、理論上は資金總額の概算が先行する。そして資

金計畧が物動及び勞務動員計畧。生産力拡充計畧に照応するものである。以上、國家資金總額は結果爲に於てその年度に於て動員充用し得る国内及び其範圍内の経済總力の貨幣的表現によつて制約され、それが後者諸計畧の成果なる國民経済の總生産価格を基礎とすることは当然である。即ち國家資金の概定に國民所得の算定把握が必要なることは勿論であるが、後者はその國民経済の物的生産力と基き推計判定されるべきこととなる訳である。かゝる意味に於て資金總額の概定は一定戰時経済の需要に對しする限度を劃するものとなり、即ち資金動員計畧は配分計畧を規定するが、併も資金總額は各生産期間の当初に於て確定不可動のものとして與へられる訳ではない。現在の如き軍事的政治的要請が強力なる場合、「経済に對する政治的優位」は或る程度まで之を認むべきであり、物資勞務の重量的能率的配置が強行されるが否かにより、経済力は変動し従つてそれに基き概定される國家資金總額も亦相當の程度まで變化し得る。かくて配分計畧は遂に資金總額を規定し、従つて資金動員計畧を規定する面をも有するが、之も或る

限度の中のことと過ぎず、配分され流通する資金の總額と動員される物的資源の總量との間にはあくまでも均衡が確保されねばならぬ。その爲には資金の配分と共にその吸収が放率的に行はれることを要するのであつて、茲に調達計畧の重要性と困難性とが存する。

以上を要するに資金計畧は動員計畧、調達計畧に分れるとはいへ、互に有機的に相附聯し他を補充するものと云ふべきである。

會議記要 (出)

日時 昭和十九年一月二十七日午後一時半
場所 國家實力研究所會議室

記

本日は荒木 中川兩理事 白井參映 石倉 河野 児山各研究員 渡辺
平井兩屬託出席の許に開催 予て配布し置きたる「資金計画の意義とその
重要」の原案を討議に付し 主として字句に關し 盛なる討論あり 約三
分の一のみを決定して残を次回に譲り 同四時半散会す。

會議記要 (十五)

日時 昭和十九年二月三日 午後二時
場所 國家實力研究所會議室

記

國家實力研究所突例研究局會議は二月三日 午後一時より兩催さる。本會議に於ては戦局の急転回に処すべき昭和十九年度の決戦施策として考慮せらるべき問題につき懇談討議、特に資金計畧策定に於て問題と存るべき点につき検討され最後に伊東参英より研究途上の必要に応じ他の調査機関の動員に關し考慮すべき旨附言ありて午後四時閉会せり。

出席者

(敬称略)

本研究所 理事 荒木光太郎
同 中川友長

九。

研究員	石倉一郎
同	河野和彦
同	児山千秋
嘱託	平井晃
同	渡辺孝恵子
大藏省側	参 獎 伊東武郎
同	大沢輝繁
同	谷村裕
同	浅野義光
参 獎	渡辺孝友
日銀側	

速記

(荒木) 今日は大変お寒いところを御集り下さいまして有難うございます。参獎の方々は本月初めて研究局會議に御出でを願ったのであります。

八月に設立になりました。それから研究局を議は殆んど毎週開いて居りました。國家資金の概念、國家資金の概念は如何に定めらるべきであるかといふことにつきまして根本的な討議研究を続け、あつた訳であります。今日はこれについて申上げてもらひるのでありますが、それよりも昭和十九年度の豫算構成も大体決つたように毎週開いておますので、その案について、御説明願ひ。併せて、本研究所の將來の研究調査に対する本研究所の御希望等について遠慮なく話して戴きたいと思ひます。

(中川) いや別に。

(荒木) 浅野さん。國民消費資金の問題は昨年八月以来打切つてしまつたのだから、あの問題は残つてあませんか。

(浅野) いや、あれはあれで終ります。

(中川) 去年の八月以来相当たつてゐて大分局面も變つて来たけれど、あれ以来どうですか。

九二

(浅野) 別に之といつて變つて居いますか。こちらの方の討議事項を聞かして戴かせんか。

(中川) それもよいけど、それよりも昭和十九年度の資金計画の第幾について聞かして戴けませんか。

(中川) 十九年度の六百億といふのは、あれは浅野君どこでやつたのか。

(浅野) 大蔵大臣です。(笑聲)
(伊東) あれで所懸になるのはどう思ふんですね。昭和十九年度に於ては國家資金計画と國民消費との間の関係がどうなるかといふことが焦點になつて来ると考へられます。

(河野) 今年は相当それが考へられますね。

(荒木) 國家資金計画の組み立て方。大蔵大臣が毎議會発表して居られますね。あれはあつた行き方でよいのでせうかね。

(浅野) あれには一方おかしなことがありますか。之は變更することか出ません。抵つて別に、それケーンズがやつてゐるような、立つ方が

九三

考へられますね。研究所あたりでこの様な役目を引受けて下さるとよいと思ひます。大蔵大臣は国民所得六〇の億と議会で云つて居られるけれども勿論それだけではないので六百億プラスアルファがある。これらの案と更に既存資本の喰ひつゝし、国民消費生活の切り下げ、それについてしつかり把握して置かねばならないのですね。研究所としては六〇の億等は肉類にしなくてもよいので企劃院でやつたようなフォームで根本的に求差して行つてもらへばよいと思ひます。ともかくとことんまでつきつめて考へれば大臣の説明は不備な点があるから研究所ではあの肉類は大して肉類にしなくともよい。それよりも既存資本の動員とか、国民消費の切り下げ等を大いに取上げてよいと思ふ。それから配分関係の分析をやつて、現在の資金計画の配分の形式を突込んでよいと思ふ。今迄は国民所得の算定などかとり上げられたか、之は勿論やつて載かねばならぬが、それよりも国力一極の肉類をやつて載いてよいのぢやないかと思ひますね。さういつた段階に来てい

と思ふ。配分との関係に於て国力の判定を全般的にやつて載きたい。名前は国家資力研究所だけと根本的に大いに間口を拓けて研究されるとういと思ふ。

(伊東) 国家資金計画も眼まぐるしい変動のために期待外れの方に行つちまふといふことがあるんだね。

(中川) だから機動性を持った計画を樹てるんだね。この頃の一年といへは相当の変動を含んだ一年なんだから、それをも含めた計画を樹てなければなりません。従つて難かしいのだな。

(伊東) 今から想像されることで、今年はインフレーションの問題がある。今年はどうしたつてこの肉類と四つに組んで切り通さなくちやなりません。

(浅野) それについて肉類に存るのは金融面存んですね。今迄はこれを忘れ勝であつた。

(中川) それだよ。僕なんかそれについて度々云つたんだからね。

(浅野) 昔は金融面をとり扱つてゐたのだが、資金計畧を樹てるときにな
ると国家資力に重きを置き勝ちに存つてしまふ。それについて忘れてし
まつた。それを一つ今年あたりは重視して金融面と国家資力とを併列
的に研究して行かねばならぬと思ひます。

(中川) それから資金の使用方法を考へなくちやならぬ。

(伊東) さうです。こいつは同様にしなくちやいけません。之によつて計
畧の効率化が決定するんですから。

(浅野) 戦争終結時代に於る金融は普通のとこ違つてゐる。物の方は機
密ばかりだから手に負へない。金融面の方は案外つかめる穴がある。
之を使つて研究の結果に基いて忠告して戴くと助かります。

(伊東) それから国債消化一本ばかりを固守してやるといふことには相当
の無理がある。これについては相当の見合ひを考へて対策を樹て、置
かねばならぬと思ひます。一体何を計畧するにあつても今迄の計畧
は案外靜的といひますか。

(荒木) さうだ。これまでの計畧はスタティックだつた。

(浅野) 同様に動的な計畧はどうするかといふ点にあるのでせう。

(渡辺孝) それから計畧の実行性といふものが稀薄です。

(浅野) 資金計畧では切符を切るといふところまで行かなくてはならぬ。
そこまで行けるか。行けるか行けぬかに同題がある。

(伊東) そこまで行けるのなら資金計畧と存在理由がなくなつてしまふ。

(荒木) 資金計畧に無理があるものとするれば何処にその無理があつたのか。

(伊東) それや拡張々々で追加的に無理が加へて来るんですねそれに計畧と
は銀行のレザールを考へておなかつたこともある。そこに金融部面に
於る大きな穴がある。

(荒木) 一体それを格にしようといふところに無理があるのぢやないか。

(浅野) 金融面には中々穴があるので大いに研究の余地がある。金融統計
は幸ひ割方あるのでこれを使つてこの穴を抽出すると思ひます。
(渡辺孝) 概束から種々の方面で金融面には大きな穴があると思ふ云は

れておますか。然し金融面をついて見たつて中々つかめ無い。だからそれの、実体的分析面に結局返つて見なければ判らぬといふことになります。

(伊東) それからね。既存資本の動員、国民消費の切り下げにつまつて来ると、どうしたつて海外資本の動員といふことに存つて来るのですかね。

(荒木) そうね。

(浅野) それから斯ういふ阿頼がある。金融面で実績をとるとき、其の実績のとり方に金融統計整備の方法ですね。こゝに相当の阿頼があると思ひます。国家資力を算定するときに最も安全なる方法ですね。これを案出することが大切だ。

(中川) 前からよく云つたのだ。国民貯蓄の本当の実績をどうして把握するかといふことですね。これは中々方法的に阿頼がある。

(浅野) 貯蓄の実績のとり方と産業貸出をやつてある産業金融統計、この

九七

二つさへ押へて置けばよい。

(渡辺亨) 可成りの程度はとれますけれど消費資金は金融面からは判りません。

九八

(浅野) 国民消費の実態はどうかつかまなければならぬので、その辺に阿頼があるのですね。生計費実態の把握の方法。これは何とかやらねばなりませんね。それから統計の整備。作製の迅速化、信頼度の高さはなんといつても大切ですね。日本は生産統計も存つておないが金融統計も存つておない。山ほどあるが使へない。

(荒木) 山ほどあるか。集算も持った統計の作製ではなかつたのですね。(浅野) 金融統計のうまい方法が特に国家資金計画の策定に資せられような方法が新しく作られなくちやなりませんね。

(荒木) 所得分布の表はどうですか。

(浅野) 本年は資金の吸収といふ阿頼がある。この表から所得分布の実態、特に職業別分布の実態はつきりしなくてはなりません。

(荒木) 兎山君 君のやつてゐる所得分布はどういふふうになつてますか。
(兎山) まだなかな

(中川) あれには新しい調査が必要なんですね。それがなかなか厄介です。

(伊東) 中川さんかさつき云はれた貯蓄額を押へるのね。あれはあやふや

なのですね。貯蓄の形態に関する統計 国債の洋動化の問題 これ
をはつきりさせて行かなくちやありません。

(中川) たゞ或る部面のみをつかまへて合計しちゃふといふのは困る。

(伊東) ニヒの穂の実質―内容を検討して見ることは必要ですね。

(中川) とにかくこいつは大切な事です。

(浅野) 金融統計をしつかりやつて下さい。

(中川) 今までの統計は何にでも役に立つように収るといふ配慮から収ら
れてゐたのです。所でどの病気にも效くといふ薬が実はどの病気にも
效かないのと同じように、こいつた統計は何にも役に立たない。

(浅野) 時に金融統計は儲け主義の統計なので役に立たない。それから国

九

家資力の根本的な所をおさへるの意味でやつて見ませう。

(荒木) この間は時間にははられてゐたから――

それは今研究所で盛にやつてゐます。

(伊東) 国民所得の算定方法に加へてそれより先の問題 お膳立ては出来

たけど、それをどの機関がどのように手筈をきめてやつて行くかとい

ふ実行上の算定問題。これは大切ですね。私つくづくこのことを感じ

ます。

(浅野) そうだ。それはそういふことだ。

荷洲国では物的所得算定方法要綱といふのを取つてますからね。これは
役に立つのですね。日本では各省に依頼する。それで大綱がわかつて
ゐても技術的見地から見つまつく。体系的に手順を決めて置かねば
ならぬ。

(伊東) ドイツのライヒ統計局はどうです。

(中川) あれはなかなかやつてゐますね。

(浅野) 時々会社とか地方に出張して経済の実態を見聞して載きたいですね。実態調査を抜きにしての研究は現在とかく空回りする。

(中川) 今はその奥なかなかなさいのでね。

(伊東) しかし、やはり実態を調査しなければ研究は進みません。

(中川) そんな場合は大いにお蔵省でバックして載きませう。

(伊東) 国家資金計重を各省が尊重するとよいですね。

(浅野) 今は国家資金計重はあつてもなくてもよい状態にある。(笑声)

(中川) それには大蔵省内部に於て資金計重に対する一致した見解に達し

計重を強固なものに仕上げなければならぬ。

(伊東) 資金計重に対する確固たる自信を持つことが必要なんです。

(荒木) では種々ありますか。どう存じました。この辺で。

會議記 要 (十六)

日時 昭和十九年二月十日午後一時半
場所 國家實力研究所會議室

出席者 研究所側 荒木 中川 函理華

石倉 河野 兒山 各研究員

平井 渡辺 西瀛託

大藏省側 下村 伊東 谷村 芳野 各参獎

日銀側 渡辺 参獎

三井信託 白井 参獎

記

先づ伊東参獎より、別紙の如き当研究所に対する大藏省側の研究依頼事項の提示と、同参獎及び芳野参獎のその趣旨の概略説明あり、同題提出者の説明の要矣左の如し。

1011

1012

一乃至四は基本的問題として就中一は國民所得の定義、概念規定の問題にも關聯し、物量的方法か人的方法かの問題に迄漸りて根本的に検討すべく、又三は特に所得分布の問題をも含むものと爲して所得層別と共に職種別分布にも此の際特に及ぶべし。

次に五月至九は資金計量策定の資に直接供するため特に研究成果の速なる提示を要請す。

右の中五は資金計量に於ける財貨の面と資金の面との均衡と何の問題、六は所謂動態經濟理論を加味せる資金計量の問題、七は臨時費支弁に対する國民經濟の弾力性把握を特に列記事項について考究すべく、八は潛在インフレーションの辨別可能な如き統計方法の建立の問題、貯蓄の限、貯蓄目標達成の方法及び從來に於ける貯蓄実績の検討等を含む。九に關しては運轉資金の現段階に於る機能と資金計量との關聯を特に重視すべく、十は自由主義下に於ける循環圖式と計量經濟下に於ける其れとを、十一、財の循環と資金の循環の両面より觀察すべき要あるべし。

次に荒木理事より、当研究所側の九項目の取次研究計画の提示あり、其の
 大要を説明し、今回の大蔵省よりの研究依頼事項と略々同一なるを以つて、
 尔後は特に基本向願の研究に進むべきことと決せり。
 斯くて午四時閉会せり。

国家資力研究所に依頼すべき研究事項

- 一 国民所得算定要綱の再検討（項目別生産額年並に控除項目）
- 二 国民所得以外の資金の構成に関する理論的研究
- 三 国家資力配分に関する理論的研究
- 四 国家資力の推計並に動員配分関係の統計方法確立に資する研究
- 五 国家資金計画に対する通貨金融面よりする研究
- 六 国家資金計画に於ける時の観念の研究
- 七 臨時国家資金計画に於ける既存資本の減耗、国民生活の切下、海外資
 金動員の状態及名義の限界に関する研究
- 八 国民貯蓄の補償に関する研究（特に法人貯蓄の性質）
- 九 産業資金の構成並に其の統制に関する研究
- 十 計画経済下の国民経済の循環図式の形成

會議記要 (十七)

日時 昭和十九年二月十七日午後二時半
場所 國家資料研究所會議室

出席者 研究所側

荒木、中川兩理事

石倉、河野、兒山各研究員

平井屬託

大藏省側

伊東、酒井、芳野各参典

日銀側

市田、渡辺兩参典

三井信託

白井参典

記

今回の會議に於ては、前回の大藏省側依頼事項に於ける細目の同趣意審
議せらる。先づ石倉研究員より右に關し別紙第一号の如き研究所原案の提
示と、その簡單なる説明あり。次いでその審議に移り大藏省側より依頼趣

旨の詳細なる説明と修正意見の提出あり。五、六、七に關してのみ審議終
了。午後四時半散会す。

右審議に基き研究所側に於いて原案を別紙第二号の如く修正せり。

別紙第一号

研究事項に対する問題点

五 インフレーションの影響を資金計画に取入れること

(一) 通貨流通速度

(二) 新投資に基づく通貨増発

六 (一) 生産と配分の間の時の「遅れ」

(二) 期間を小さく区切ること

(三) 経済循環を背景とする資金計画の策定

七 (一) 軍需工業生産力維持

(二) 最低生活確保

(三) 占領地用米の問題

八 (一) 如何なるものか長期の野蓄合り

(二) 預入高と引出高の両面の観察

九 軍需会社に於ける運転資金及び自己資金

別紙第二号

大藏省よりの研究依頼事項と於ける問題矣

(一九二一七)

国家資力研究所

五 国家資金計畵に対する通貨金融面よりする研究

(一) 政府散布資金に基く所得形成の過程及びその態様

(二) 政府散布資金の信用及び通貨に及ぼす影響

(三) 投資乗数理論の現段階に於ける妥当性如何の問題

六 国家資金計畵に於ける時の觀念の研究

(一) 期間の区分

(二) 資力の生産と配分との間に於ける時の「遅れ」

(三) 経済循環を背景とする資金計畵の策定

七 戦時国家資金計畵に於ける既存資本の減耗 国民生活の切下 海外資

三

金動員の地位及びその限界に関する研究

(一) 軍需工業生産力維持

(二) 国民最低生活確保

(三) 共栄圏各地の対戦寄與と其の「インフレーション」問題

三

會議記要 (十九)

日時 昭和十九年三月十六日午後一時
場所 國家實力研究所會議室

出席者 大藏省 西井 湯野西参典

日 銀 渡辺参典

三井信託 白井参典

研究所 荒木 中川西理幸

石倉 河野 児山各研究員

渡辺囑託

二三

二四

今回は城南ビル移転後の第一回研究局會議として石倉研究員より「國家資金計畫に就いて」なる題目の下に左記諸項目に就き國家實力及び國家資金に関する別紙諸論文の紹介及び比較検討あり

一 國家實力及び國家資金の概念

一 右ニ概念と國民所得との範圍の相違

二 戰時經濟に於ける國民所得把握上の特徴

一 物的方法

一 事前的觀察

一 經濟循環と國民所得

三 實力及資金の均衡條件と乖離の可能性

一 乖離克服の可能性

報告の要旨は左の如し

「國家實力及び國家資金の概念に關しては、右諸氏により若干の相違あるも、略國家實力は物的なる經濟力或は生産力と解し、國家資金を以てそれに立向ふべき購買力と解し居るか如し。國家實力を物的なるものと把握する立場は小泉氏に於て最も顯著として、之に反し新庄氏は人的要素、精神カ、智能等を亦なく國家實力中に含ましめ居れり。

國家實力の把握に當り國民所得の把握はその中核をなすべきものなるか最近の如き計量經濟下に於ける國民所得把握上の最も重大なる特質は國民所得を經濟循環の過程に於て捕へんとすること或は國民所得の循環を構想することなり。尤も國民所得の循環といふも種々なる觀見よりなされ得べし。先づ森田氏は前記論文に於て「巨大なる戰爭財政の干渉が國民經濟の再生産過程に如何に影響しつゝありや」を課題として英國政府發表の白書に基き戰時に於ける英國國民所得循環の圖表を描き居れり。然れども之は元來白書が單なる資金の側面よりの分析に止り居る結果、森田氏の循環圖亦資金の觀見に止り居れり。従つて之より資金とその背後に在る物的實力

との關聯、或は國民貨幣所得と物的所得との關聯、兩者の乖離の可能性は直接結論し得ざる如く思考せらる。

之に反し小泉、新庄、高橋の三氏は國家資金計量の課題が當然に國民所得、更には社會總生産物を循環の過程に於て把えらるべきことを要請すると、の見地に立ち、財貨と資金との關聯を循環過程に於て考察し居れり。即ち資金計量の円滑なる運行の條件として各種財貨間並ひに各種財貨と各資金との均衡條件を分析して資金と資金との乖離の可能性を論じ居るなり。而して資金と資金との乖離が就中軍需財生産と右部門より生ずる貨幣所得との關係に由ること予きは勿論にして、之の依用は國民經濟を再生産し循環過程に於て考察することにより始めて明白にせられ得べし。

右に次ぎて矢張り資金と資金との乖離の一個の可能性として右三氏に依れば勞務所得の向類が改めて考察せられ居れり。

之に關し小泉氏は戰時經濟に於て重要なるは購買力の合計にありず、之の對象となるべき年生産物の大いさなりとして勞務を含みざる社會總生産

物の總価格のみを以つて國民所得と存す立場を採り居れり。

新庄氏も亦生産関係者に対する本源的所得を生産に直接関係なき第二次的
的なる用役所得へ移転流通することにより國民所得は如何程にも増大し得
るも、その購ひ得る対象は生産物の量を越えざることを指摘し居れり。

高橋氏は小泉氏とは反対に用役労働所得を國民所得中に算入すべしとの
立場に立ち居るも、その理由は資金計画の目標をインフレーション防止の
基準として社会の總購買力を明にするに在りと考ふるが為なり。而して同
氏も右用役労働所得を所得の再循環過程に於て把へ、かくすることにより
るも國民所得に算入することか二重計算に非ざることを論證し居れり。

即ち右の如く小泉、高橋両氏の見解は正反對の立場に立つも共に一理あ
り、注目すべきものなり。何れにするも用役労働所得は之を單純に二重計
算なりとも然らずとも断言すべからず、國民所得の循環過程中に於て把握
し、所得算定目標に照応して処理すべきものなるべし。

かく資力と資金との乖離の可能性は國民所得を循環過程に於て把握する

ことにより明にせられたる次第なるか、その克服の方法如何。

購買力吸収と生産増強とに在ることは勿論なるが前者に關し小泉氏は單
純財生産よりの所得と等額の貯蓄の存さるべきこと、或は高橋氏は公積金
貯蓄だけの購買力が不貽化せらるべしと存すのみにて貯蓄の時期に付きて
何等云ふ必らずし、之は所得数回の流通を経て貯蓄せられたる場合と、流通
せざる以前に貯蓄せられたる場合とによりて流通場裡に収用せる購買力量
としては非常なる相違あることを忘れたる議論と云はざるを得ず、新庄氏
が所得の消費化を制して源泉に於て吸収確保する要を説けるは、この突に対
する考慮に基くものにて一徹優れたる所見といふべし。然れども同氏の生
産増強余力に關する所見は余りに樂觀に過ぎざるや、即ち同氏は國家資金
の増大國家信用の累積必ずしも憂ふるに足らず、我國の現實は尚決して完
全雇傭の状態にありと謂ふを得ず、信用創造による貨幣所得の増加に伴ひ
生産の増強せられ得る余地大なりと強調し居れり、然れども我國の現實が
文字通りの完全雇傭のは實に存りや否やは暫くおき、戦局の苛烈化に伴ひ着

しくそれに接近せることは否突すべからず。従つて国家資金の配分、機能に伴ひて容易に増強せらるゝと存すことは極めて空想的且つ危険にあらざるやと思考せらる。

之より自由討議に入り所謂完全雇傭の意義及び、計量経済の意義、変遷等に關し活潑なる議論ありて午後四時半散会せり。

参 照 文 献

中山伊知郎 経済戦力としての国家資力

森田 優三 国家資力と国民所得

塩野谷九十九 最近に於ける国民所得の研究とその問題

小泉 明 資金計量と国民所得

新庄 博 国家資金とその形成

高橋 泰藏 経済の循環と資金計量

(以上「国家資力の問題」所載)

新庄 博 国家資金論序論

(以上「経済及経済学の再研究」所載)

會議記 要 (二〇)

日時 昭和十九年三月廿二日午後一時
場所 國家實力研究所會議室

記

本定例研究局會議に於ては渡辺亨恵子氏により「國家實力の形成と循環」
題し、先に印刷に附せる經濟循環圖を基礎として大要別紙の如き報告あ
る。右は資金計重の全經濟過程に於ける地位を定めるために、其の構想的
展開を図式化するものにして極めて詳細なる分析を加へられたり。唯、資
金の循環と財の循環との結節点につき今後検討を加ふべきものあり。其れ
研究については後日に委ね午後四時閉会せり。

出席者 大藏省 伊東事務官、渡辺技師

日 銀 市田参典、渡辺参典

研究所員 荒木、中川西理事

二三

石倉 河野 児山各研究員
渡辺囑託

二三

國家實力の形成と循環、発展

於國家實力研究所渡辺報告 一九三三

國家實力把握を目的と存す經濟圖表の具備すべき諸要件

一 國家實力は國民經濟的概念なること

一 市民的概念に非ざることの証明

國家實力は歴史的、具体的、即ち現在日本の戦争經濟把握の概念なるこ
と

一 一般的、抽象的、觀念的、又は安楽時代の西歐的觀念と無縁なること
の証明

二、我國官僚の戦時経済指導過程の天才的 意に成る概念にして「学究者」的 既成的概念に非ざることの意義の闡明

三、日本経済の具体的研究のみかこの概念を豊富に存しうること

四、従つて経済図表に於ては現実日本の経済に対する現実日本の国家統制

意志と實際の關係表示にとむること

(三) 国家實力は日本戦争経済をその關係 運動 発展に於て把握すべき概念なること

一、靜的、固定的 物的概念に非らずして嵐の如き運動と経済主体の戦闘 意慾を内包する概念なること (客觀的であると共に主体的)

二、この實施をいみじくも「機動的」と称せられることの意義の闡明

(四) 国家實力は資源資財資金の運動を全体として包括し内に背反と統一を内 包する動的概念なること

国家實力把握の経済表は資財の循環と資金の循環を表示せるものなること、 ことを要すべきこと

二三

(五) 資財循環表に於て把握すべき諸事

一、物的資源の配置 流通とストック

(1) 資源の存 (地域別 種類別)

(2) 生産手段 (耐久資財及消費資財) の配置 流通 ストック (経済部

門別 経営規模別)

(3) 生活財の配置 流通 ストック (家 公共の文化施設別)

(4) 軍事施設 行政施設並に所用資財の配置

二、人的資源の配置 組織 余力

(1) 人口配置 (性 年令 職業 地域別)

(2) 生産組織 (法人 個人別企業別) (地主 農業経営者 其他業別経

営者 職員 労務者)

(3) 労働時間 (産業部門別)

(4) 教育 研究組織 (種類別 教師 学生 研究者等)

(5) 生活組織 (世帯数 家事労働の時間 労働余力)

二四

(ハ) 軍事組織、行政組織（軍人、官公吏其他要員）
三、生産力指標

(イ) 経済循環としては總生産物の用途別表示を不可缺と存す（生産手段
生 資料―生活必需財、享樂財別―、国防手段別）

(ロ) 一人当り一時間当り生産物（経済部門別）

(ハ) 経済編成替、資産転用可能量

(ニ) 輸入品（用途別）

備考（官吏の勤務接客婦のサービスマ等を無差別的に価格表示を為しても
国力表示とは非ざることを国力表示は具體的、質的労働の分類表示
によりてのみ可能なること）

（生産部門分割の諸学説批判表示）

(六) 資金循環表に於て把握さるべき諸点

一、所得の流通

(イ) 生産に於て形成せられたる価値による把握（経済部門別）

二五

二六

(ロ) 分配に於ける把握（地代、利子、利潤、俸給、賃金）（地域別、收
入階級別分布）

(ハ) 所得支出（消費、貯蓄、納税）

二、資本の流通

(イ) 金融機関別予金、貸出（産業部門別）總額

(ロ) 国定資本の回転

(ハ) 流通資本の回転

(ニ) 商業資本の流通（商品取引、証券取引）

三、所得流通と資本流通の接融点

四、預金通貨並に現金

(イ) 資財循環と資金循環の關聯表示

一、購買力過剰要因

(イ) 未完成品生産過程に形成せられたる所得

(ロ) 預金と投資と生産財供給量との背離

- (一) 企業整備等による貨幣資本の遊離
 - (二) 信用創造（産業再編成を促す）
 - (三) 生活財生産の縮小に拘らず、就業者の増大による貨幣所得の増大
- 二 資財過剰要因

- (1) 自家消費の意義闡明
- (2) 生産期間長期に亘るものゝ完成提供
- (3) 次期繰越高

(ハ) 資金計重の地位

一 資金計重の現実的地位

- (イ) 資本と労働の流れを決定するものは自由経済に於ては価格（物価及び金利）なるもの計重経済に於ては国家の配分意志なること
- (ロ) 資金計重は物と人の国家的配分に「カネ」の流れを副はしむる任務を有す（私有制に立つ國家は物と人を支配すべく命令のみに依るものに非ずして、私有制に依する対価の流れを円滑ならしむべく志向

するものなればなり）

(ハ) 即ち資金計重は「ロ」の目的を達成すべく、中央銀行の信用創業政策を以てする価格による誘導を避け資金の循環（所得並に資本の運動）を全面的に統制するものなること
即ち早くより政府は

貨幣資本統制に 資金調整法 銀行等資金運用令を

に 統制統制 貸金統制

所得支出統制 貯蓄計重 を以て

せられ 更に財政計重をこの資金の全循環との関係に於て策定せられ来たりたること 又銀行合同勧奨により全貨幣資本の流れを統制せられたることとはこのことを示すものなること
更に企業整備資金措置に於て政府は債権債務関係の統制といふ資金計重の有する深奥の關係に突入せられたることの意味はこれを示す
資金計重は全金融財政政策を内包しその前進に標準を提供すべきもの

なること

(九) 資金計取に於ける「価格」の意味表示

一 資金計取下に於ては価格により経済発展が行はれると非ずして価格を手段として経済統制が行はれることへの著目
二 達成のためには以下の諸点への反省を要すべきこと

公共価格制

(イ) 資本並に労働の自由移動の完全防止

(ロ) 最小生産費保障の補助金政策

(ハ) 超過利 抑制、独占価格の削減

(ニ) 割当制の全面化開始法則よりの独立

(ホ) 購買力制限

(ヘ) 国際価格よりの独立

(十) 資金計取の構想的展開

一 資金計取はその深奥の意義の発現に於て勤労体系を支配し、一切の積

極債務関係を国家的に処理せんとする論理的歴史的方向を有すること

二 一の方向は単一銀行制による非現金支拂の体系化に於て促進せらるべ

きこと

三 支出労働量による企業計算の確立

四 客観的必要による標準家計の確立

五 資金計取がその意義を発揮すると共に価格経済、市民経済は国民的支

拂共同体に進展せしめらるべきこと

會議義記 要 (二一)

日時 昭和十九年四月六日午後一時
場所 國家資力研究所會議室

記

本定例研究局會議に於ては河野研究員により別紙の如き項目に依り「新投資の經濟機構に與へる作用について」報告あり。今回は先づカーン・ケインズの乘數論を中心として投資が全体としての經濟計畫に波及し行く過程の分析を行ひたり。乘數論の經濟理論構成の上に占むる地位については特にケインズの「一般理論」以来注目すべきものあり。之が批判檢討は重要なものと思ふべし。ケインズの所謂「動的分析的方法」には殘されたる尙殘少かりす「構造分析的方法」への研究へ進むべきものなるか現實の日本經濟の生産構造の分析は次回に譲り質疑応答の後午後四時開會せり。

一三

出席者

大藏省 河野技師
日銀側 渡辺参英

研究所側

荒木 中川西理平
石倉 河野 兎山各研究員
渡辺囑託

一三

新投資に関する若干の同題について

河 野 和 彦

新投資の経済機構に英へる取用の量的質的分析の到達は日本経済の構造の把握に新投資による経済構造変動の動態的把握にあるものと考へられる。この目的に接するためには、云はゞ序論的意味に於て、次の事項を手がかりとして進めたい。

(一) 序説

(イ) 財政現象分析に於る乗数論的観念の発生。

(ロ) 乗数論の斯る地位は何故に英へらるゝに至つたか。

一 乗数論発生の契機

二 乗数論の経済理論に於る地位——「カーン」を中心として

11111

(ハ) 新投資と乗数

(ニ) ケインズ一般理論に於る乗数論の地位

(イ) ケインズ一般理論の構成

(ロ) 投資乗数の理論

(ハ) ケインズ投資乗数に対する批判

11111

會議記要 (二十三)

日時 昭和十九年四月十三日午後一時
場所 國家實力研究所會議室

記

定例研究局會議は大藏省野田勅任調査官の來所を尋問會 先づ野田調査官より昭和十九年度國家資金計更の大綱につき御説明願ひ、特に昭和十八年度計更との特異點につき種々御明示願つた。其の討議経過については別稿「野田調査官を囲む座談記事」参照。次いで中川理事より國民野蓄調査要綱の趣旨につき説明あり。之が詳細なる検討については別途會議に於て試みることにし午後四時半閉會せり。

当日の出席者左の如し

大藏省側 野田勅任調査官 西井 大沢西事務官 浅野技師

銀側 渡辺参謀

一三五

研究所側

荒木 中川西理事 石倉 河野 本藤 児山各研究員 渡辺囂
託 川喜田氏

一三六

以上

野田調査官を囲む座談記事

「荒木」お忙しいところをお集り下さいます。有難うございました。本日は大変お忙しいところを態々野田調査官がお出で下さいまして昭和十九年度の國家資金計更に就いてお話下さるさうで、誠に有難うございます。実は今日の會議に於きましては國民野蓄の調査方法に就きまして御討議願ひたいと存じて居りましたが、それよりも前に、野田さんから十九年度計更に就いてお話をお伺ひする方がためになると存じますので宜敷くお話願ひたい。こう存じます。それでは野田さんお願ひ致します。

「野田」実は只今お手元に配りましたものは（昭和十九年度國家資金計更

編成形式に関する件案）全く未定稿でありますし、たゞ大蔵省内部の
 資料の一つなのでどうぞそのお積りで願ひます。本日は十九年度の資
 金計畧の編成形式に就きまして申し上げ国家資力研究所の方で批判し
 ていたゞいて之を改正し文書なものに作り上げてゆきたい。こう再び
 て居ります。十九年度の資金計畧は目下策定中でございまして来月に
 は完成の予定で、編成形式案の前文のところは省略致しまして、後
 の表のところから入りたいと思ひます。五頁の別表一のところを御見
 願ひます。別表一の「国家資力計畧へ若は概算」の形式であります
 か、之は十八年度には国家資金計畧の中にはなく、單に参考資料とさ
 れてゐたものであります。今年の計畧はもう少し大担に作つて国家資
 力を概算し、之を配分調達するのだと云ふふうに、はつきりさせてみ
 たいと考へてあります。国家資力は之だけあるのです。そこでこいつ
 を配分するのですとした方が人を納得せしめる事が出来ると思ふ。
 賀屋さんの議会演説もさうして居られるのでその線に沿つて行きたい

と考へてあります。内容に就いてみますと大體昨年度と大した違ひは
 ございせん。一番はじめに国民所得と国民所得以外の資金と相成つ
 ております。附ちこの二つで国家資力が出来ると云ふことになつて
 居ります。国民所得は先づ物的所得次いで用役勤勞所得、振替所得、
 海外事業勞務利益等となつて居りますが、この奥に就いて今年と昨年
 との大きな違ひは振替所得を国民所得のうちに入れたと云ふことであ
 ります。この理由は斯うであります。通常の觀念でいきますと振替所
 得は所得のうちに入つてゐると云ふこと。それから大藏大臣の議会演
 説で六百億のうちには振替所得を入れてあるとされたこと。それで之
 を入れた方がいろ／＼の奥から都合が宜しいと考へたわけです。物的
 所得の方の農林業、水産業、鉱業、工業等に就いては皆さん既に御承
 知と思ひます。農林業のうちには畜産が入つて居ります。数字を出
 す上に同類と存ります農林業中の米に就いてであります。米の生産
 奨励金は今までは振替所得のうちに入れてございました。ですから生

産の觀吳から考へますと石当り六十二円五十錢でありまして、百姓はそれを六十二円五十錢として受取つてゐるのでありますから、之を物的所得のうちに入れた方がよくはないかと云ふ問題があります。この他に半製品、仕掛品、企業消費等の抵乗はつきりしてゐなかつたものはつきりさせて之を入れた。企業消費は例へばその中の交際費等は接客業所得の中に算へられる等の関係がありますので結局別口に取り扱はないで控除項目の中に入れてダブルな嫌にしました。用役勤勞所得では内容に検討を加へる部分が出て参りました。振替所得は特殊補助金を物的所得の中に入れたと云ふ関係がある。この中には理論的に考へてみてどうかと思ふ点がありましたのでそれに就いて検討を加へて置きました。

その次に国民所得以外の資金に就いていあります。その中の既存資本の動員には減価償却相当額、在庫消費、資源回收、既存設備動員等があります。その次の大きな項目として海外資金動員があります。

この内容としては関東州財政課徴、对本邦投資、在外敵産処分代金、在外資産処分並びに金の現送額、為替銀行為替戻、現地調弁財政資金等が含まれます。それからこの中には臨時関係の借入があります。それから其他として金融的資金の問題があります。之は昨年もありました。今年はそのを整理したわけです。其他と云ふ項目の中には企業整備関係等資金放出と致しましては國民財産の移転、企業統合資金、共助金等が含まれ、金融的資金等には「企業現金預貯金の増加」「その他」が含まれるわけであります。

金融的資金と致しましては二、三と挙げましたいろいろの項目に分けてあるのであります。この辺のことに就きましては尚研究の余地がございます。十一頁の金融的資金等の中の其の他のところでは企業損失（収支不足分）貸出、株式会社債等拂込重複があります。之は重複勘定である。その次は個人消費資金貸出であります。その次に配分計

頭との間の要調整額が参りますか。二の中には国庫予備金、財政及び産業資金に含まるる間接税等、国民消費資金に含まるる消費税等、個人手持現金増加額が含まれるわけであり、この中国庫予備金かどこに行くかまたはつきりしてない問題であります。国民消費資金に含まるる消費税、財政及び産業資金に含まるる間接税之は配分との関係になつて来るので、税を入れるか入れぬかを考へられるわけでありす。

その次に個人手持現金増加に就いていありますが、最近は一貫して他の関係から個人の保蔵が相当増えてゐると考へられますので、大体その合理的と考へられるものに就いてのみ考へに入れろと云ふ事にしたわけでありす。

以上は国家資力計畧の概要であります。之には相当批判の余地があると思はれますので、折角御研究願つて遠慮のない御批判を仰玉たいと存じます。

その次は別紙二であります。之は参考につけたもので、斯う云ふ見方もあると云ふ。云はゞ理論的な見方でありす。別紙一の形をとるか、別紙二の形をとるか、と云ふ問題があります。別紙一の形をとる方が従来の方式に沿つてゐるので之にした方がよいと考へて居ります。別紙二は理論的な観点から取られたものでありますから、將來の研究に資したいと考へて居ります。云はゞ別紙一を理論的にはつきり整理再編成したものであります。

十六頁の国民消費資金概算に於きましては消費税などを除いたものと之を含んだものの二つを取らうと考へて居ります。

次に別紙三であります。資金配分計畧、資金調達計畧、資金動員計畧の三つから成る総合計畧を立てようと云ふわけでありす。資金配分計畧は資力を如何に配分するかと云ふのでありまして、財政資金、産業資金、消費資金と云ふ事になります。

その次の調達計畧は資力の中、動員される資金を如何にして調達す

みかと云ふ調達形式の問題であります。即ち財政資金調達形式と致しましては、租税、公債、現地国庫収入、か考へられ、産業資金調達形式と致しましては、企業自己資金、株式、社債、借入金等があるわけでありまして、之は従来の通りであります。産業資金は上の配分と見合せて国内と対外とに分けて行きたいと思ふ。

次に下の段の資金動員計画は動員形式であります。この内容は国内動員資金と現地動員資金となつておりまして、国内動員資金は財政課徴、国民貯蓄、企業自己資金、通貨増発と分れて居ります。現地動員資金は、現地調弁財政資金、本邦投資その他に分れて居ります。

別紙四は個別計画に入つて居るわけでありまして、之は国内産業資金に就いて斯う云ふ計画をやりたいと云ふ考へのあるわけでありまして、今年はその内容を詳しくやつてゆきたいと考へてあるわけでありまして、どうも今までは大きく太く分け過ぎた嫌ひがありましたので、実際の資本統制と乖離し

二四

がちであつた。そこで出来るだけ産業資金の統制を詳細に立て、現実と乖離しない様にやつてゆきたいと云ふ趣旨であります。個別計画としては更に野暮計画がありますか之は追つて作る考へてあります。その他の個別計画に就いては大体従来のものと変わりがありません。大体極めて概括的な話でありましたので、お解りはくかつたと思ひますが、只今から自由にお話願つて御検討願ひたいと存じます。

(荒木) どうも有難うございました。振替所得を国民所得の中に入れたといふのはどういふ事情か御説明願ひたいと存じます。

野田) 大蔵大臣の説明では議会に於て之を国民所得の中に入れたと云つて居られますし、資金計画の方では国民所得以外の資金の中に入れてある。どうも之は真合が悪いのです。それから一聯の価格差調整金は生産者の側から見ると、国民所得のうちに入れた方が良い様に思はれるのです。かうすると国民所得の中に何かフワフワしたものが這入つて来ると考へられる訳であります。さう云ふことを云ひ出すと

在来の官吏の俸給です。これなどもフワフワしたものといいふことには
ある。

(荒木) 控除項目は変つて来ますか。

(野田) 変つて来ると思ひます。中々理論的に行つたものには、實際部

面に於て資料の規制を受ける部分があるのですが、まあ一応として、
筋道を立て、後は推算でやつて行くより外はないと思ひます。

(荒木) 金融業の方は――

(野田) 控除項目の中に這入つて存いのですか。これは研究の余地がござ
います。勞務供給業といふのがあります。これは勞務を世話

する人だけかと思つたが、實際は物の運搬をやつてゐるものがあつて
こうなると交通業の中に入れた方がよいといふことに存る訳です。

(荒木) さうですか。

(野田) それから放送ですね。之は物的所得に入れるといふのも変ですし
人的所得に入れるのも変です。物の生産がやないといふので通信に入

れました。それから新聞雜誌は物的の方に入れました。荒野君、半製
品は十九年度に完成しても十八年度からの継続であれば、どういふこと
になるのかね。

(荒野) スレの計算といふことになりませんか。中々厄介です。

(野田) 闇のことがあつたのですか。この闇かうまく行くかどうか。普通の
航空機工業の様な軍需工業に於る闇賃銀は財政資金の中から拂はれ
てゐますが、国民消費資金の闇は如何う見込むかといふ困難な問題か
ある。闇の關係は主として国民消費資金について厄介な問題となつて
ある。

(荒木) 大体研究室時代に討議したものを盛込まれたのですね。

(野田) さうです。然し余り進展してゐないです。

(中川) 「国民所得以外の所得」の「其他」は如何なるものを取り上げます
か。そのとり上げるプリンシプルですね。これは――

(野田) 之は大体資金の統制の方から限界を置いて、統制とあつて

来るものをあげて来る。斯う漠然と考へてゐます。

(中川) 漠然としてゐますね。

(野田) 今の処では資金統制の対象となるものと貯蓄の対象となるものの二つから追つて行くので漠然として来ます。理論的にどうもスラツと来ないものがあるのです。

(中川) 資金の動きは或る條件の下に動くのですが、この条件ですね。これをどうするか。

(浅野) それはちやんと見合ひが立つてゐます。

(中川) 見合ひ見合ひで行くとそりや話は簡単に存るけど、それより物
の一体として考へるとどうなるかといふ所に問題がある。動いた金を
とりへたいといふのが、どこまでの動きをとらへるかといふ事だね。

(浅野) 個人の間の動きはとらぬといふことになつて居ります。

(中川) 個人貸借もとらぬといふのか。

(浅野) とそれらとりたいんですかね。とれぬからとらぬといふことです。

三二

ね。

三三

(野田) 「其の他」といふ所ですね。これを一つ充分御研究願ひたいと思
います。

(酒井) 今の限界の問題は統制限度の問題と統制の可能性との見合ひの問
題でせうね。

(中川) さうですね。そこで其他と其他以外とを單純に合計しちやふとい
ふのはいけないぢやないか。見合ひ見合ひで行くと單純だが質的に違
ふものを合計するといふのはどうなるかね。

(酒井) 経路循環の中にとらへるにはどうすればよいかといふことですね。

(野田) 大蔵省では金融的な額で行つてゐるので總額を抑へたいといふ考
へがある。

(中川) いやそれならそれで徹底すればよい。それ以外のものを加へて
云は、玉石混淆ですから、そいつを一度整理する必要があると思ひま
すね。

(野田) まあいろいろ向躰があると思ひますが、出来るだけ早く御調査願
つて御批判を仰ぎたいと思ひますのでよろしく御躰ひ致します。
(荒木) どうも有難う存じます。

會議記

要 (二三)

日時 昭和十九年四月廿日午前十時
場所 國家實力研究所會議室

大藏省總務局總務課 齊藤 属

同 考查課 小島 課長

同 同 前野 事務官

同 國民貯蓄局 伊東 事務官

同 同 守屋 事務官

日 銀 渡辺 参典

三井信託 白井 参典

研究所 中川 理事

石倉 河野 斎藤 児山 各研究員

渡辺 獨記

(五二)

記

(五三)

今回の會議は中川理事司会の許に昭和十三年十一月内閣統計局收製に繋る「國民貯蓄調査要綱」及び「國民貯蓄調査解説」を原案として貯蓄の統計方法の考究を存せり。先づ同理事より右「調査要綱」の由來の説明と共に、本要綱の調査方法は今日の時代に適せず。又目標をも異にし居るに付、その批判的検討こそ國家實力の研究に肝要なるべしとの注意あり。次いで「調査解説」の附録「本調査の結果に依る國民貯蓄總額の計算方」の審議に務る。冒頭 本調査は「貯蓄」投資」の前提に立ち居れるに付、兩者の關係に付結局貯蓄の定義に迄溯りて種々意見の相諒あり。就中國民所得を源泉とせざる銀行の信用創造による貯蓄、銀行の支拂準備金、個人の退職金等は如何に考へべきや購買力吸収といふ觀點よりすれば、前記の前提にて十分なりや。等論議せらる。特に中川理事より貯蓄実績調査と貯蓄計画策定の爲の貯蓄の統計的把握とを區別すべき旨注意ありかくて國民貯蓄局側より貯蓄計画策定に當りて貯蓄の意義、範圍に付、如何なる立場を採り居るやの説明を求むることとなり。正午散会す。

會議記

要 (二五)

日時 四月二十四日午前九時半

場所 大藏省總務局總務課長室

出席者

大藏省總務局

野田調査官

坂野技師

三井信託

白井参典

研究所

石倉 河野、斎藤、各研究員

渡辺囑託

一五三

一五四

今回の會議は特に野田調査官よりの要望に基づき同調査官室に於て石倉研究員司会の許に前回に引き続き「資金計費新形式」に関する討議を存せり。先づ前回に論ぜられたる諸問題に關して委細を尽さざる実あらば再度の討議を認め、次いで新規の困難に向ふこととせり。主要なる論点及びその経過次の如し。

一、「企業消費」の中の現物給與、厚生費、交際費等に付て、先づ之か先般の大藏省側の説明の如く二重計算なりと付、質問あり。右は本項目を原案の如く企業の経費と考へるか然らずして所得の消費と考へるかによつて決まる訳であり、根本的な案ではない。然らば原案の如く之等を總て経費として落す理由が何處と成るや野田調査官より右は專ら会社経理常識に基けること、又謂はく強制されたる物資労務の消耗であつて個人が自由に処分し得べき所得と性質を異にし、抵つて貯蓄の対象とむを得ない等の説明があつた。併しそれに対して更に住宅支給の代償として住宅手当、実費を超過する旅費等現金給與の形を採る経費もあり、限界

の判定は依然困難なるべき旨の疑問が提出された。更に研究所側より元來國民經濟的には企業所得の労働力の維持、再生産に必要なものは所得の消費と看做されるべきであつて、企業の経費と看做されるのは物的再生産に必要な物資、労務に限らるべきことか論ぜられ、結局、根本的には資力計算算定の為には私經濟的立場を離れて、國民經濟的立場に立つ原価計算体系の確立を持つべき必要ある旨が結論された。

二 資力計算と名付けられたる理由について

之に關しては野田調査官より本年に於ける資力計算とは、敗年迄の如く國民所得を中心として資力を概算したのと異り、戰爭目的達成の爲の要求か前提され、それに応ずる爲に国内各種資源資材を結合させて國家經濟力一級を創造し、向上させる意味を持ち、従つて他の凡ゆる諸計算の上に立つべき抱負を以て時に資力計算と名付けられたことか説明された。更に同調査官はこの計算が大藏省の所管に属するのを寧ろ異とすべきで、本來は經濟參謀本部とも云ふべき如の仕事存することを付言された。又本計

算が資力増大に対する資金面よりする障害を打破する爲の計算だとすればそれは根本に非ずれば現在社會機構の基本的性格にもふれるべきものなることか研究所側によつて指摘された。

更に國家資力計算は斯くの如く配分計算に於ける現下の強力なる要請に応ずる爲、強度の計算性を以て資力を形成する計算であるから、かくして形成された資力を以てしても猶配分計算からの要求に応じ切れな程その要求が過大な場合には、遂にその要求に対して一疾の限度を劃すべき權威を有する計算であると思はれる旨の傾向が石倉研究員よりなされたのに対し、野田調査官それを肯定し、事實本計算により臨時軍事實費の限度を劃したことが確言された。

三 資力と資金の區別

更に野田調査官より資力と資金との兩者の觀念、及びその關聯に付疑問があり、研究所側より「國家資力の向類」等により一級の通説の説明ありたる故、貨幣の二重的性質（即ち資力の總括的計算單位としての性格と本

来自由なる購買力としての性格）に關し、種々論議が行はれた。即ちこの二重性格の故に資金計重が著しく複雑性を帯び、統一を缺いてゐること、資金の性格が根本的に改訂されねば、金理的資金計重は策定し能はぬこと、そしてそれには相当急進的な経済機構の改革を要すべきこととまで話が反

四 価格補給金

価格補給金は單なる振替所得なりとする説も一理なしとは謂はれぬが、かく考へて之を物的所得の評価から除外すれば、物的所得が買の値をとる部門あり。而もそれか殷賑産業部門にあり、一見して甚だ奇異なる感を喚へること。又補給金によつて労働報酬が支拂はれる実情存と野田調査官より説明あり、特に從來の自由主義下に於る価格と異なる。新しい國家的見地に立つた二重価格制下に於る国民所得の評価方法が新しく考へ直されべき必要が結論された。

五 個人手持現金増加

之に關しては研究所側よりの発言を待たずに大蔵省側に於て資金計重と配分計重の消費資金よりは引落し、動員計重の通貨増額にだけ計上すれば、是との自発的修正あり、研究所側と完全に一致した。その理由として、本項目は消費可能資金と見るよりは貯蓄すべくして貯蓄し得ぬ資金であること、物的に把握された消費資金に通貨を加へ合すことは計重として一貫性を缺くことか挙げられた。

更にこの問題の序でに現行資金計重中に性格の異なる各種項目が雜然と並列してある缺點が大蔵省自らによつて繰返し強調された。

六 「国民所得以外の資金」の中の「其の他」に付て

本項目の「イロハ」は財貨、労務と見合は存い資金存なので、野田調査官の私見として「金融的資金」として一括する案が述べられたが、既に時間は正午に迫り十分審議の余裕がなかつた。只此の問題に關し動員されるべき資金即ち純生産物と見合ふ資金の外に、流通界は遂に手額の資金を要す

ること、かくて資金總額を通貨流通量と考へれば純生産物としての国家資金よりも資金は常に大であることか指摘され、此の關係を資金計重に取入れざる爲には資金の方で現在の如き純生産物のみでなく、總生産物、或は取引總量を考慮に入れる必要が述べられた。

七 余論

最後に野田調査官より戦費調達に於ける租税と公債の比率は完全なる資金計重が策定されれば当然それに基づいて決定されるべきものと信ずる旨の話あり、話は転じて各国の戦費調達の現情に移り、進んで新しい徴税方法、税源を窺見すれば租税制度は決して行詰まるべきものでないこと、そして現在は恰も明治維新に於て従来の地租單一税制が廃棄された如く徴税法の大改革を要すべき時期であることに迄及んだ。